

たまのよこやま

夏の思い出はグリーンガラス



親子 experience SUMMER 体験

暑いのが夏。それにしても暑かったのが今年の夏。庭園の芝生だけが涼しさを演出してくれています。

連日の猛暑にもかかわらず、夏休みの体験教室には多くの親子が参加してくれました。縄文土器作り、古代の布作り、縄文アクセサリー作り、そして火おこし体験とどの教室も夏休みの宿題の一コマにと、年々その人気が高まっています。アクセサリー教室では、30人の教室に入りきれず、臨時に会議室を会場に切り替えての開催。それぞれ徐々に親子そろって汗を流してくれました。

やはり一番大変なのは、炎天下での土器焼き。親子の力作100点近くをいっぺんに焼き上げなければなりません。しかも今年は2日間の連続実施。この日のために体力維持を図ってきたスタッフも、さすがにバテバテ。それでも自分の作った土器が割れずに焼けるか、真剣にみつめている参加者に答えるべく必死に作業が展開されました。結果はもちろん全部無事に焼き上がり、誇らしげに土器を持ち帰っていく親子の姿が印象的でした。

東京埋文は、これからも縄文体験を応援します。

(小葉)



「お兄ちゃん、まきを集めてきたよ」「よっし、こっち、こっち」おき火の周りに土器を置いて、じっくりと乾燥させていきます。



「ここは、こんな感じじゃないか」午前中に粘土で形を作り、午後から文様を付けていきます。縄文土器作り



「ちょっと待って、糸がからんじやったみたい」横糸に縦糸をからめていき、約2時間でコースターほどの布が仕上がります。古代の布作り



「あっちっ」舞切り式の火おこし道具を自分たちで作り、初めての火おこしを体験。火おこし体験

こんにちは 出前授業 で～す。

平成 19 年度から実施してきた出前授業は、今年度で 4 年目に入りました。初年度は 6 件と少なかったのですが、目や耳からだけではない体験型の学習を取り入れる学校が増えたことと、口コミでの評判が広がったようで、年々予約が多くなってきました。

平成 22 年 9 月現在までで、延べ 45 の小学校や中学校などにお邪魔をし、子供たちだけでなく担任の先生方、保護者の方々にも火おこしや勾玉作り、土器作りなどで、楽しみながら縄文時代を体験していただきました。その数なんと 3289 人。

ありがとうございました。



特に注文の多い出前は、やはり火おこし体験です。毎年 4 月から 6 月にかけての小学校の見学時にも、火おこし体験を希望する小学校が多くなっているのですが、それに比例するように多くなっています。

とてもありがたいことです。

また、今年度の特徴として、勾玉作りの注文が増えてきています。見学時に火おこし体験をしたので今度は勾玉作りを、ということのようです。

嬉しいですね。



出前授業は、必要な道具を車に積み込んで出かけます。そのため、埋文センター近隣の地域を対象としてきました。今年度はそこにも変化が現れています。インターネットの普及によってホームページから情報を得た、23 区などの小学校や PTA からの問合せが数多くあったのです。

そういう時代になったんですね。



埋文センターではこれからも出前授業を充実させて、縄文体験を応援していきます。 (並木)



さあさあ その線から入っちゃいけないよ
火おこし体験の前説です



勾玉の石って意外とやわらかいのね



みんなで協力すれば、なんとかなる・・・かなあ



お父さんもがんばる お母さんもがんばる



大感激!!

多摩ニュータウンと東京都心部とを結ぶ鉄道の一つに小田急多摩線があります。始発駅は1990年に開業した唐木田駅です。その南側の車輛基地となっていてところには、かつて多摩清掃工場の建物よりも高い台地がありました。その台地全面に広がっていたのが、No.740遺跡です。旧住所は、多摩市落合字棚原で、面積は57,000㎡もありました。東京ドーム(46,755㎡)の約1.2倍の広さです。

1982年から2ヶ年にわたる調査の結果、遺跡全域に散らばるように、ケモノを獲るための落とし穴が490基余りも見つかりました。調査当時としては、一つの遺跡で発見された落とし穴の数としては世界一でした。ギネスブックには載っていませんが。

落とし穴の形は、開口部が長方形～楕円形で、大きさの平均は長さ1.6m、幅0.6m、深さ0.9m、体積0.9㎡です。穴の底には槍のようなものを刺し立てた構造と、それのないものがあります。

写真左は落とし穴の1例で、埋まっていた土砂を取り除いた状態です。底面中央に仕掛けの跡が見えます。写真右は落とし穴の底部を割って、仕掛けの断面を出したところです。穴の中に棒状の痕跡が縦方向に3本あるのがわかりますか？

落とし穴は、単独で設置された場合もあったでしょうが、形と大きさの似た穴が近接したり並んでいる例もありますので、何基かがセットで仕掛けられた場合もあったでしょう。落とし穴の分布密度を「遺跡面積÷落とし穴の数」で求めると、1基あたり約115㎡になり、これは11.5m×10mの広さで、畳敷き

に換算すると畳7枚を敷き詰めた範囲に1つ落とし穴が掘られた計算になり、かなり密度が濃いです。

遺跡の発掘は、最初に草木を刈ることから始めます。刈った後は見晴らしが良く、台地上を自由に歩きまわることができました。しかしながら、おそらく縄文時代には繁茂した木々で覆われ、下生えに篠竹でも生えようものなら、歩けるところは限られていたでしょう。縄文人が歩いた山道(踏み跡)は、ケモノたちの獣道と共用でした。落とし穴はそのような通り道に、幅一杯に掘られたのでしょうか。成果の方はどうだったのでしょうか。余談ですが、調査時に誤って調査員が落ちたこともありました。

本遺跡では、古代の落とし穴も45基発見しました。形は縄文時代のそれと似ていますが、大きさの平均は長さが2.0m、幅0.6m、深さ1.6m、体積1.9㎡です。幅は同じですが長さは1.3倍、深さは1.8倍、体積は2.1倍も大きくなっています。

縄文時代の木製の掘り棒と古代の金属製の鋤(スコップ)という掘削道具の違いでしょう。幅が共通している点は、環境や道の様子が縄文時代と古代とで大きな違いのなかったことを暗示しているのかもしれない。

多摩ニュータウンを中心とした多摩丘陵は、縄文人のみならず古代の人々にとっても狩りの場として広く利用されていたことが、本遺跡の調査を通してわかりました。本遺跡の調査報告書は、東京都埋蔵文化財センター調査報告第4集と第5集に収録されています。(小島)

1 / 964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

#5 多摩ニュータウンNo.740 遺跡



落とし穴の完掘状態



仕掛けの断面

石器の「ツボ」 Vol.7

石鏃（その1）

旧石器時代と縄文時代の石器の観察のツボを紹介する連載の第7回。毎回、石器をひとつずつ紹介していきます。今回は、石鏃です。

石鏃の「鏃」とは「やじり」とも読み、弓矢の「矢」の尻につける石器です。黒曜石やチャートなど比較的硬質の石材を用いた、長さ2cm、重さ2g前後の小型で、縄文時代の遺跡の多くで発見されるポピュラーな石器です。

弓矢とは、弓によって矢を遠くまで飛ばし突き刺さることで殺傷する道具で、写真左下のように使います。

写真右下（中央）のとおり、石鏃は、竹などでできた矢の棒の部分（筈）の尻に挟み込んで用います。弓矢は弥生時代以降では戦闘用の武器にも使われたようですが、縄文時代にはもっぱら狩猟用に使われたと考えられます。

一方、縄文時代以前にあたる旧石器時代には、狩猟には、投げ槍（尖頭器）を用いていました。縄文時代になってはじめて使われる弓矢は、投げ槍と比べ命中率や殺傷能力が高く、狩猟の効率は格段にあがったものと推測できます。

狩猟対象の動物は、シカやイノシシであったと考えられます。というのは、全国の遺跡から多量のシカやイノシシの骨が出土しているからで、中には石鏃が突き刺さった状態での出土例もあります。

動物に突き刺す道具である証拠は、石鏃そのもの

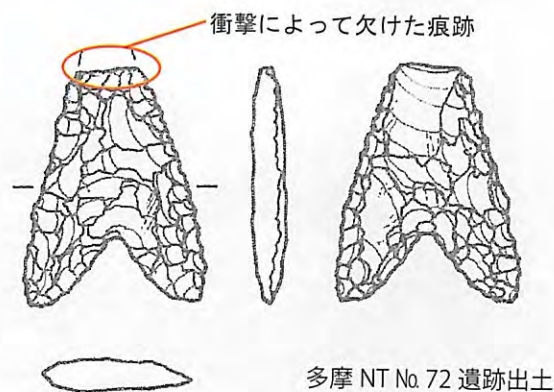
の形態や痕跡にも見るすることができます。図右上は、多摩ニュータウンNo.72・796遺跡で出土した石鏃です。本来尖っているはずの先端が欠けて、平らになっています。これは、動物に刺さった際に衝撃で欠けてしまったためと考えられます。こうした類例は、御堂島正氏の実験研究によって明らかになっています。

相当の衝撃をもって命中する弓矢。狩猟効率の高い道具とは言え、対象は敏捷なシカやイノシシです。見つけ次第やみくもに射撃していつも命中するというものではありません。けものみちや糞などの痕跡を丹念に探索し、計画的に追い込むことによって始めて、弓矢の効力が発揮されると考えられます。次号は、さまざまな形の石鏃について紹介します。

（つづく）

石斧の「ツボ」：石鏃は、弓矢の一部です。縄文時代、シカやイノシシなどを仕留めるために使われていました。

（伊藤）



弓矢の使用例



装着された矢の複製品（中央）と黒曜石製の石鏃

復原住居の建替え

後編

定点カメラで撮影した建替え後半の様子を示してあります。サイズを同じにしてありますので、前号の分と併せて切り分けると、パラパラ漫画のようになります。（長佐古）





シリーズ
多摩の縄文
アらかると



—縄文人のこころ(2)—

前号で「男は狩り」「女は採集」と縄文時代に仕事の役割分担があったことを記した。前回のおさらいもかねて縄文時代の様子をもう少し具体的にながめていきたい。当時の生活の基本はドングリ採集。そして、そのドングリ系縄文人を支えていたのはまさに女性人。また縄文三大発明の一つである縄文土器の製作に係っているのも女性。土偶を作り子供を生育てるのも女性。常に縄文生活の中心に女性がいます。一方の男性人はというと、狩りをしながら採集もするが、くだらないプライドとつまらないロマンで生きているので、どうやらこと縄文時代にあっては、男性人の立場は危うい。がんばれ 草食系男子。

とここまで書いてはみたものの、実は考古学で男女の分業を証明することはなかなか困難といったところが正直なところ。数少ない実例をいくつか挙げてみましょう。

男女の分業を示す唯一の考古学的資料は、弥生の銅鐸に○頭と△頭で描かれた人物像。○頭で描かれた人物は弓矢を持ってシカとイノシシを狙っている。さらに魚と一緒に描かれたものもある。△頭で描かれた人物は杵を手に臼をついている。つまり狩りと魚とりをしている○頭が男性で、脱穀作業は△頭の女性が行っていると、解説する。矢じりや臼の出土品を見ただけでは男女差は見えてこないが、銅鐸絵画がそれをフォローしてくれる。

土器はどうだろうか。「正倉院文書」には土師器は女性が、轆轤ろくろを使って窯で焼く須恵器は男性が作ったことを記している。このことから、土師器に先行する縄文、弥生土器も女性が作ったと推測されているし、多くの民族例もそれを支持している。ただし、1m近い大形の土器は、体力勝負なので男の



仕事か。

あの岡本太郎を爆発させた、豪華で華麗な縄文土器の背景には、狩猟本能があると彼は読み解く。ならば縄文土器は男性の仕業か。まれに土器に指紋が残されたものがある。殺人事件の鑑定さながら、その指紋から男女を見分けようとする分析があるが、まだその成果はあげられていない。

縄文時代の女性原理を象徴するものに土偶がある。実は多摩ニュータウンNo.9遺跡で出土した土偶の何点かに、はっきりとした三日月状の爪の痕が縦列に残されている(写真・展示中)。土偶を作ったときに偶然付いてしまったもので、通常はきれいに消し取るが、横着をしたのかいづくもの爪の跡が残されたままになっていた。この華奢で繊細なネイル跡は紛う事なき女性のものであると疑わないが、それが4000年前のものであることを思うとさながら神秘的にさえ感じてくる。

男女の身体的な違い、脳の構造的な違い、DNAの違いなどあらゆる性的な差異があることはいうまでもない。その差異をそれぞれの時代、それぞれの地域の中でうまく生かしてきたからこそ、人類はここまで生き続けてこれたのだろう。おそらく、生きていくだけでも精一杯だった縄文時代では、男も育児をするし調理もする。女も狩りをするし家も建てる。みんなが協力しあわなければ生きていけなかった。誰もが生きるために一通りのことをこなすオールラウンドプレイヤーであったはず。そこには安易な現代的フェミニズムは通用しない。

現代日本のパパも台所に立つ機会が増えてきている。子育てをしない男を父とは呼ばない、らしい。みんな協力して生きていく。さながら縄文返りといったところか。そんな縄文時代を今年の猛暑の中で虚ろに思う。ところで、アマゾンのヤノマミ族の男は一切子育てをしない。男女の役割り、それぞれのもようでもある。(小葉)

「たまのよこやま」の由来 万葉集巻二十之四四一七の防人となった夫の旅立ちに備えて、山野で馬に草を食べさせていたところ、馬は逃げてしまった。やむなく徒歩で多摩丘陵を越えることになってしまった夫を見送る妻の嘆きを詠った「赤駒を山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」(宇治部黒女) を由来としています。



たまのよこやま 82

2010年9月30日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合1-14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>